

ですが、このルカ福音書のイエスの誕生物語より、わかりやすい神のみこころの啓示はあまりないでしょう。最初から神は身分の低い人、貧しい人、立場のない人に心を留め、共感をいただき、訪れてくださる神なのです。

この神のみこころの啓示にどのようにこたえましょう。瞬時に行動を起こすしかありません。天のみ使いのお告げを聞いた羊飼いのように。羊飼いたちは、「急いで行って、マリアとヨセフ、また飼葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。」そして、羊飼いたちは、「神をあがめ、賛美しながら帰って行った」(ルカ2・20)と福音に書かれています。かれらのその後の日常生活は、羊飼いのまま変わらなかったのかもしれないが、救い主の到来の喜びをもって生きる人々になったに違いないと思います。かれらの生活にキリストの光が輝いていたからです。

今も、キリストの光は、わたしたちの間に輝いています。わたしたちはその光を羊飼いのように、行動を起こし自分から出て「探す」

ことが求められます。キリストはわたしたちが祝うエウカリスチア・感謝の祭儀の中おられます。キリストはわたしたちのそれぞれの家庭の中におられます。キリストは助けを求めながら叫び声すらあげることのできない貧しい人、苦しむ人、圧迫される人におられます。

「永遠の父よ、みことばは人となり、世界に光が与えられました。信じる者の心に注がれたキリストの光が、日々の生活に輝くものとなりますように」(教会の祈り、主の降誕、朝の祈りの結びの祈願より)と祈りましょう。



『クリスマス・キャロル』

聖心の聖母会 林 明恵

まだ十一月だというのに、町にはもうクリスマスイルミネーションが燈された。

クリスマスのロマンティックな雰囲気、酔い、ヨーロッパ風にお祝いしようと、世俗の商業戦線に乗っかってみた時があった。また、クリスマスの「本当の意味」を味わうべきだと、キリスト教的解釈を心に留め、友人を誘ってミサに授かった時もあった。最近思うのは、その方法がどんなであれ、「クリスマスミラクル」があるとということである。

「イマニユエル」
C・デイケンズの『クリスマス・キャロル』は、私に多くの回想をさせてくれた。

スクルージという心の冷え切った、恐ろしい老人のクリスマスイブの出来事の話なのであるが、昔の仕事仲間マーレーの亡霊がスク

ルージの過去・現在・未来を見せる。彼の封印してきた、つらく孤独な幼少時代、人への優しさが無い現在、そしてその延長線上にある未来を見せられた彼は、回心を迫られる。

私自身の回心の時を思い起こさせる。そういうのは、たいていどうしようもない状況に陥った時である。直ぐには、気付かせてくれないし、心から分かせてくれない。待たされ、そしてNOを言わせてもらえない切羽詰った時、そんな時が、丁度「回心」の頃合だったりする。

スクルージは、マーレーの亡霊に見舞われるまでに長い年月を要した。その夜、彼は思い出したくない過去を辿って二重の「苦しみ」を味わい、これまでの自分に対して「死」に、全く新しく生まれ変わらせてもらった。神にしかできない、少し強引とも言うべき(!?)「恵み」を、私は「クリスマスミラクル」と呼びたい。

彼は、この回心により、その後